

地域寺院と資料学

地域アイデンティティーの確立へ

パネリスト

渡辺匡一

要旨

福島県いわき市所在の浄土宗名越派の本山、如来寺には、南北朝時代以来の千五百余点の典籍が所蔵される。『三語集』は、戦国時代末期、当寺の住侶の編纂した説草集で、所載話からは、岩城における浄土僧の知識の水準がうかがえる。

また、長野県諏訪地方における真言宗の灌頂道場、仏法紹隆寺には、室町時代後期からの二千余点の典籍が所蔵される。醍醐寺や高野山などから典籍が運び込まれる一方で、核をなす永正年間写の典籍群は、実は下野国で写されたものであり、岩城の寺院との交流も見い出せる。当時の知識の伝播は、中央から地方へという一方的なものではなかったのである。

私たちは、地域寺院の資料調査を通じて様々な知見を得ることができる。しかし、同時に果たすべき役割もあるだろう。それは、蔵書整理にとどまらず、地域のアイデンティティー確立への提案など、文庫自体のプロデュースである。寺院の資料調査の可能性について提案してみたい。

〔参考文献〕 渡辺匡一「如来寺松峯文庫蔵『三語集』について―浄土宗名越派の説草集―」『説話文学研究』第三七号 二〇〇二年六月、「仏法紹隆寺覚え書き」『内陸文化研究』三号 二〇〇四年二月



渡辺匡一（わたなべ きょういち） ■1962年、東京都生れ。早稲田大学大学院博士課程満期退学、文学修士。現在、信州大学人文学部助教授。
主著：『続神道大系』習合神道（神道大系編纂会）、『日本古典偽書叢刊』第一巻（現代思潮新社）、『蛇神キンマモン』（『文学』9-3、1998年7月、岩波書店）

1 ■はじめに

渡辺 ■信州大学の渡辺でございます。「地域寺院と資料学」というタイトルで発表させていただきます。よろしくお願ひいたします。

今から八年前、一九九七年のことになります。説話文学会が福島県のいわき明星大学で行われました。いわき（岩城、磐城）とは、福島県の海沿いの一番南、勿来の関を越えた所です。その時のシンポジウムのテーマは「説話文学と東国」というものでした。学会が行われましたのが「いわき」という、東北地方の入り口ともいふべき場所であったこともあり、シンポジウムでの討議の基調には、東国、あるいは東北地方、今はあえて「地方」という言葉を使わせていただきますが、東北地方Ⅱ「周縁」もしくは「辺境」という認識があったように思います。

「地方史研究」という諸地域の資料調査・研究の成果を基盤に持つ日本史学とは異なり、日本文学の研究は、たとえば最近の文学史などを見ても、

まだまだ「京都」という、中央の文学、あるいは文化活動を中心に据えており、地方の価値は、中央との距離感、すなわち「都には劣るけど、なかなかのものだよ」といった意味でしか見出しにくいといった問題があるように思われます。都を中心とするヒエラルキーの中からいかに脱却するかが、日本文学、中世文学における「地域研究」の大きな課題であると、個人的には考えております。

さて以前には「中世の資料なんて地方にはない」といった声がよく聞かれました。今でもおっしゃる方がいて驚くこともあります。近年の資料発掘の成果を見ていると、決してそんなことはないということがわかります。もちろん、平安時代や鎌倉時代のものがボコボコとでてくる、というわけではありませんが、様々な発見がなされております。多くは仏教関係の資料になりますので、既存の文学ジャンルや研究で対応できる資料ばかりではありません。そこは研究方法も含めて工夫が必要ということになります。しかし、これはこれで楽しいものだとも思います。手垢にまみれていない資料の中から、自らの手で問題を見つけ出していけるということでもあるからです。

2 ■ 知識の享受・蓄積 1

— 奥州岩城における浄土宗寺院 —

説話のシンポジウムが行われました翌年、縁あつていわき明星大学に赴任することになりました。私はもともと『神道集』や『琉球神道記』を研究していたこともあり、浄土宗名越派の寺院には特別な思いを持っておりました。『神道集』の最古本、旧赤木文庫本は浄土宗名越派の円通寺（栃木県益子町）で書写されておりますし、『琉球神道記』の著者である袋中は、岩城出身の浄土宗名越派の学僧だったからです。赴任してからしばらくして、地元の郷土史家の方たちのお宅にお邪魔するようになり、また名越派の本山であった如来寺との関係もできまして、学生たちと蔵書の調査に入ることになりました。

如来寺は浄土宗名越派の三世である良山の建立によるもので、寺伝によれば、元亨二年（一二三二）の創建とされます。名越派の本山として、また談義所として、専称寺、成徳寺、円通寺とともに、名越派の中心寺院として勢力を誇りました。

浄土宗は、宗祖法然から数えて三代目、良忠の後に六派に

分かれまゝ。六派のうち、現在も浄土宗の中心勢力である白旗派に對峙する有力な一派として、名越派は活躍します。派祖良弁が鎌倉名越谷に派を起こし、二祖良慶は信濃国善光寺に居を構え、三祖良山に至つて、奥州岩城の地に如来寺が建立されました。名越派の本山であつた如来寺には、名越派の秘伝書を納めた「月形箱」をはじめとして、南北朝期、一三五〇年代から明治三十年代まで、約六百年をかけて蓄えられた典籍、約千五百点が所蔵されています〔1〕。

如来寺の聖教調査については、調査は、一九九九年四月より始めました。地元の郷土史家であり、いわき市の文化財審議委員をされている方々と、門屋温氏（いわき明星大学）、いわき明星大学の学生たちとの悉皆調査です〔2〕。聖教は二度の被害に遭つており、長く放置された状態でしたので、まず、半年間の虫干し作業を行い、その後、書誌カード取りを始めました。現在は、書誌カードを取り終わり、見直し作業を経て、パソコンへの打ち込み作業を行っています。今後は、データベースの構築、目録作成、資料集の編集という順に進んでいく予定です。

さて、奥州岩城の地、言うなれば辺境の地にあつて、知識はどのようなにもたらされ、蓄積されたのか、その一例として、如来寺の聖教から発見した『三語集』についてお話ししたいと

思ひます。

浄土宗名越派の説草集ともいうべき『三語集』は、現存しますのは上巻（九十九話）のみですが、もともとは上・下二巻、もしくは上・中・下三巻であつたと思われまゝ。編者は如来寺十三世、天蓮社良要、成立は慶長元年（一五九六）です。良要は、『琉球神道記』の著者袋中の叔父にあたります。『三語集』の序には、法談の助けのために編んだと記されています。現存の九十九話は、天竺・震旦・本朝の順に、三話一組で配列され、各話の書き出しも、「梵に云く…」「漢に云く…」「和に云く…」の定型句を用いるなど、共通話も含めて『三國伝記』に酷似した体裁を持ちます。

出典文献としては『三國伝記』八話、『私聚百因縁集』八話、『宝物集』八話、『元亨釈書』七話、『古事談』一話、『徒然草』一話などが確認できます。『三語集』と、『三國伝記』や『私聚百因縁集』が深い関係が見られることは、湯谷祐三氏の論考からもうかがえるように、これらの説草類が浄土宗内で行き交つていたことを推測させます〔3〕。

さらに興味深いのは、『古事談』、『徒然草』といった書物の享受が、奥州岩城の地に成立した『三語集』に見えることです。現在、信州大学の学生たちと演習で『三語集』を読んだり、以下の成果は、学生たちの研究成果とも言うべきもの

ですが、【資料1】は『三語集』第四十二話「玄資僧都」と、その出典と思われる『古事談』第三の「玄資為渡守事」です。玄資の話は様々な説話集等に引かれますが、『三語集』の玄資話は、もつとも『古事談』所収話に近い文章を持ちます〔4〕。

【資料1】『三語集』第四十二話「玄資僧都」

倭曰、玄資僧都ハ南都第一ノ碩徳、天下無双之智者也。然シテ通世ノ志深シテ、不_レ好_二山科寺ノ交_一ヲ。只三輪河ノ邊ニ纒_二結_一草庵ヲ隱居ス。然_二桓武皇帝依_レ施喚_二、時々雖_レ從_二公請_一、猶非本意_二乎、平城天子ノ御時、雖_レ被_レ補_二僧都_一固辭ノ一首、

三輪河ノ清キ流ニス、ギテシ 衣ノ色ヲ猶_レヤケガサン「中略」

『古事談』第三「玄資為渡守事」（国史大系）

玄資僧都者。南都第一碩徳。天下無双之智者也。然通世志深シテ。不好山科寺之交。只三輪河ノ邊纒結草庵隱居云々。而桓武天皇依強喚。時々雖從公請。猶本意存ケルニヤ。平城御時。雖被補大僧都自辭。獻一首和歌。

三輪河ノキヨキナガレニス、ギテシ衣ノ袖ヲ又ヤケガサン「中略」

また、【資料2】は『三語集』二十九話に見られる『徒然草』の引用部分と、該当する『徒然草』百四十段です。『三語

集』本文の傍線部「吉田ノ神主兼孝法師ノ云ケル詞ニ」との文言に続いて、『徒然草』百四十段の文章が引かれます。『三語集』は漢字片仮名交じりの表記ですが、文章は『徒然草』に一致します。『三語集』の成立が慶長元年（一五九六）ですので、『徒然草』の享受としては早い時期のものとして特筆されます。また『徒然草』が、浄土宗内で説草として受容されていたこともわかります。すでに戦国時代には、奥州において『徒然草』が享受されていたと言えるでしょう〔5〕。

【資料2】『三語集』二十九話「莊子本指」

漢云、莊子曰、「凡夫云人ハ、恒_二有_レ限_一之身ヲ求_ム無_レ限之物ヲ。意_レ常_二不_レ定_一」。和_二加_レ倭_一云、吉田ノ神主兼孝法師ノ云ケル詞ニ、「身死テ財ヲ殘ル事ハ智者ノセザル也。不_レ好_二者貯_レ置_{モル}拙_ク、吉物ハ心留_トメケン_ト無_シ墓_一。コヂタシ多_ル、マシテ口惜_シ。我_レコソエメナド云者共、有_リテ跡_ニ争_ヒタル、最_サマアシ後_ハ誰_ニト心サス物アラハ、生_内ニ_ニ可_レ讓_ル。朝夕無_テ不_レラシ叶_ハコソアラメ、其外_ハ何_モ持_タテ、アラマホホシキ。」

『徒然草』第百四十段（正徹本）

身死にて財残る事は、智者のせざるなり。よからぬ物貯え置きたるもつたなく、よき物は心とめけん、はかなし。こちたく多かる、ましてくちをし。「我こそ得め」な

と言ふ者どもありて、跡に争ひたる、いと様悪し。後は誰にと心ざす物あらば、生けらんうちにぞ譲るべき。

朝夕なくて叶はざらん物こそあらめ、その他は何も持たでぞあらまほしき。

【資料3】は『三語集』九十九話「忍性」です。『元亨釈書』の忍性話を適宜抜き書きし、病人への施行を中心にした話として再構成されています。

【資料3】『三語集』九十九話「忍性」

和曰、極楽寺ノ忍性ハ和ノ磯城嶋ノ人也。好レ戒学。寛元ノ初ニ集テ五機ノ癩人万余ヲ、施コト食ヲ、一日夜為ニス母氏ニ奈良坂ノ癩者手足繚戻シテ難ム于行丐ニ。以故ヲ数日不レ食セ之有矣。時ニ性在ニ西大寺。憐レ之晝至ニ坂宅。負レテ癩ヲ置ニ鄙市。夕負テ帰ス旧舎ニ。如此者ノ数禮シ、隔日ヲ而往ク。雖ニ風雨寒暑、不レ缺。癩ノ亡ニ誓テ曰、我必ス又生此、為テ師ノ役下、酬レ徳ヲ。而前ニ留テ一ノ瘡ヲ、為信ヘシト耳。徒ノ中ニ、有ニ額ニ瘡于者ノ善シ供給ニ。性詣テ四天王寺ニ、聞テ豊聡太子ノ四院悲願 敬母 敬母事、志慕ス焉。永仁二年、奉レ勅管ス天王之主務ヲ、捨テ俸餘ヲ、答ニ悲敬ノ二院ニ。此ノ寺ノ大門之外ニ、有ニ衛門鳥窟。鉦木宏材、歳久シテ朽頽ス。性出シテ新意ヲ、以石ヲ新ニ之。高さ二丈五尺、堅確瑩滑ナリ。國人拭レ目ヲ。嘉元元年六月病ス。七月十二日

逝ス。八十七。伽藍八十三、塔婆、大蔵、諸州河橋一百八十九ヶ所云々。尺書明戒人師也。

戦国時代から江戸時代初期にかけての浄土宗名越派の大学僧である袋中は、琉球から日本へと戻り、京都三条の檀王法林寺を中興して以降、多くの著作を残します。その中には『釈書少略頌』、『釈書拔書』、『元亨釈書難字所少分抄』といった『元亨釈書』の抜き書きがあり、その他、『琉球神道記』などにも『元亨釈書』の引用が見えます。袋中の執筆活動は、京都に移つてからのものではありませんが、『徒然草』や『元亨釈書』を出典話として持つ『三語集』の存在を考えますと、袋中の執筆活動を支えていた知識自体は、京都ではなく奥州岩城での修行時代に培われたように思われます。岩城の地には、おそらくは浄土宗内のネットワークによって多くの説草、知識が運び込まれて集積されており、袋中という学僧によって、再び京都へと還流したといえるでしょう〔6〕。

戦国時代、奥州岩城の地には、浄土宗内のネットワークにより、次々と知識が集積されていったと思われるのですが、それでは、他宗派ではどうだったのでしょうか。次に真言宗寺院の動きについて考えていきたいと思います。

3 ■ 知識の享受・蓄積 2

—奥州岩城における真言宗寺院—

実は、いわき市という所は、現在寺院の七割が真言宗寺院という大真言王国なのです。数ある真言宗寺院の中で、いわき市西小川に所在する宝聚院の聖教調査を、如来寺調査と同様のメンバーで行ってきました。宝聚院は、寺伝によれば、建久三年（一一九二）、宥尊の開山とされ、中世以来、岩城地方の真言宗の道場として、数多の学僧を輩出し続けました。

現在、宝聚院には千点を超える典籍が残されており、その中には、印融著『二十四帖並後記』（元龜二年（一五七一）宥性写）や、薬王寺八世純瑜著『糸玉抄』（室町時代末期写）、醍醐寺報恩院十六世寛濟筆『秘抄』（寛永三年写）の他、御流神道の口伝を集成した『御流神道口説』（近世後期写）などの貴重書が確認できます。調査の方は、如来寺と同様に、パソコンへの打ち込み作業を行って状況です。

中世における岩城地方の真言宗寺院というと、薬王寺が有名でして、金沢文庫に所蔵される『宝寿鈔』などからも薬王寺のことは知ることができます。大同年間（八〇六〜八〇九）、徳一の開山とされる薬王寺は、岩城における真言宗の中

心寺院として、戦国時代から江戸時代を通じ、岩城の領主の庇護を受けました。一五〇〇年代に住持であった深瑜、宥堅、純瑜（鏡算）は、それぞれ学僧として有名です。残念ながら、薬王寺は何度も火災にあっけていまして、現在は、わずかな印信を残すのみといった状態です。したがって、宝聚院の所蔵する聖教は、中世における岩城地方の状況を知ることのできる貴重な資料ということになります。

中世における岩城地方の真言宗寺院には、どのように知識が伝えられたのか、という問題を考える際に、醍醐寺無量寿院の院主である俊聡、堯雅（一五一一〜一五九二）による、無量寿院流（松橋流）の東国伝播を見逃すことはできません。坂本正仁氏、藤井雅子氏の論文から、必要と思われる箇所だけを選んで【資料 4】の表にいたしました【7】。

俊聡、堯雅は、付法のために、たびたび東国を訪れます。

例えば、薬王寺六世の深瑜は、天文八年（一五三九）に醍醐寺で俊聡に印可を受けますが、天文十九年には堯雅を薬王寺へ迎え、薬王寺の次の住持となる宥堅、宝聚院の宥鏡とともに、総勢五十三人もの僧侶が無量寿院流の印可を受けます。

この五十三人という数は、醍醐寺の俊聡、堯雅が一度に印可を授与した数としては突出しており、岩城において、いかに真言宗が盛んであったかがうかがうことができます。俊聡や

【資料4】俊聡・堯雅による無量寿院流（松橋流）の東国伝播

年月日	執行寺院	受者
天文2年(1533) 6月12日	仏法紹隆寺	俊聡↓俊円
8月15日	能延寺	俊聡↓俊照 (25人)
天文8年(1539) 4月8日	醍醐寺	俊聡↓深瑜
天文19年(1550) 8月3日	薬王寺	堯雅↓深瑜 (53人)
		有堅
		有鏡 (宝聚院)
永祿3年(1560) 3月20日	仏法紹隆寺	堯雅↓俊応 (12人)
		有尊
		堯雅↓有誉 (15人)
元亀1年(1570) 7月27日	薬王寺	堯雅↓尊朝
元亀2年(1571) 6月20日	薬王寺	堯雅↓純瑜
天正3年(1575) 3月9日	仏法紹隆寺	堯雅↓尊朝 (39人)
天正5年(1577) 3月4日	薬王寺	堯雅↓純瑜
天正12年(1584) 3月14日	醍醐寺	堯雅↓乘信 (能延寺)
天正16年(1592) 7月12日	醍醐寺	堯雅↓尊朝

※仏法紹隆寺(信濃国諏訪)、能延寺(下野国氏家)、長命寺(信濃国佐久)

堯雅をたびたび迎えるなど、中央の知識を盛んに集積していった岩城の地は、やがて純瑜という、大学僧を生み出すことになるのです。

純瑜(一五二一〜一五八二)は、岩城で生まれ薬王寺で出家、根来寺、高野山、醍醐寺などでの修学の後、薬王寺に帰

山し、薬王寺第八世となります。代表的な著作としては、醍醐寺報恩院流と松橋流に関わる四度加行の注釈書である『糸玉鈔』があります。

【資料5】をご覧ください。宝聚院に所蔵される『糸玉鈔』の奥書です。これによりますと、「元亀二年孟春の頃、八莖山の閑所において書き記した」とありますので、純瑜が『糸玉鈔』を著したのは元亀二年(一五七二)の一月ということになります。八莖山は、薬王寺の隠居寺であったと言われています。

【資料5】宝聚院蔵『糸玉鈔』奥書

于時元亀二年孟春之比、於八莖山閑処集記之。予去弘治年中、醍醐山登之曰、報恩院前長者源／雅大僧正受御口決。其後江州下着之砌、於神照寺一／付彼本流草案之一。然而今又当寺流為資助、付／此流書改之一。雖然三寶院通用之条、大体無相／違故源御口備之。但於報松異曲者分其旨一書／之。又以一一非愚推集諸抄認之。当寺^梁可為／後資之至要者歟／一右私非入室印可受法之輩者、不可授与之一。若背／此旨、自由披見シ書写之者、兩部三宝八大祖師可／蒙治罰者也。堅可守此掟一。堅可守此掟。／鏡算記之^{卷第五十四}

『国書総目録』の『糸玉鈔』の項には、大谷大学、高野山三

宝院（寛文五年写）、高野山真別所（元禄九年写）に所蔵されていることが確認できますが、国文学研究資料館による善通寺（香川県）調査においても、所蔵を確認できました。また長野県諏訪市にあります仏法紹隆寺にも、近世の写本で、それも薬王寺で写された奥書を持つ本が存在いたします。今後各地で存在が確認される可能性は非常に高いと思われます。岩城という地場のもとに集積されていた真言宗の知識が、『糸玉鈔』という形で結実し、各地へと伝播していった、ということになると思われます。

ちなみに、【資料4】の表を見ますと、純瑜は『糸玉鈔』を書いた五ヶ月後の元亀二年六月に、堯雅から無量寿院流（松橋流）の伝授を受け、さらにその六年後、天正五年にも再び伝授を受けるなど、『糸玉鈔』を書いた後も学問修養に励んでいたようです。特に天正五年の伝授は、純瑜の格別の願いにより出かけたと、堯雅が記しています。

純瑜の後も、薬王寺には、後に京都智積院の二世となります祐宜が入寺するなどしており、岩城の真言宗寺院は、当時の「はやり」とされた知識を集積し続けていたということになります。岩城地方における浄土宗寺院や真言宗寺院の調査からは、当時の知識を集積し続け、繁栄を誇った仏教国岩城の姿が浮かびあがってくるのです。

さらに、ということになります。【資料6】をご覧ください。実は、知識を集積し続けていたのは、浄土宗と真言宗だけではなくたようです。比叡山叡山文庫真如蔵に所蔵される『教誠儀鈔物』という真言律宗の書物の奥書には、元亀四年（一五七三）ですから、先ほどお話ししました純瑜が『糸玉鈔』を書いたのと同じ頃になります。岩城国の長福寺に、宇都宮本勝寺の祐順房なる僧侶が遠路はるばる訪れて、書写したことが記されています。長福寺は、岩城地方における真言律宗の中心寺院であったといわれています。現在、典籍類は所蔵されていないとのことですので、これ以上のことはわからないのですが、浄土宗、真言宗とともに、真言律宗においても、知識の集積がされており、長福寺は東北地方の一大拠点として、多くの僧侶を集めていたのではないかと推測されます。

【資料6】叡山文庫真如蔵『教誠儀抄物』奥書（元亀四年）

元亀四年（一五七三）西癸五月二十八日奥州岩城国小川於

長福寺書写之ノ雖惡筆以当用間書之。後見之方一返可願

廻向者也ノ下野宇都宮本勝律寺祐順房通四賢

中世において、岩城の各宗派の寺院がこれだけの知識を蓄え、繁栄していく背景には、戦国大名岩城氏の存在があると思われるのですが、この点については、現在のところ資料等の積

み重ねができておりませんので、可能性を提言するだけとさせていただきます。

4 ■地域間の交流 1 —諏訪から岩城へ—

中世において、東北岩城の地へと知識が集積されていったことは、今お話したとおりですが、それでは、どんなルートで岩城へと知識がもたらされたのかと考えますと、先ほど【資料4】で見ました、俊聡、堯雅が東国を巡業したルートが重要であると考えられます。

【資料4】の表の内、執行寺院の項目をご覧ください。最初にあげました仏法紹隆寺は、長野県諏訪市にあります。次にあげました能延寺は、栃木県宇都宮市の北、氏家の地にありました。そして薬王寺です。少なくとも、真言宗における知識は、東山道を抜け、宇都宮を通り、白河を経て岩城へ、というルートが存在したようです。

このルートの上で起きたことだと思いますが、調査を進めていくうちに、岩城と長野県の諏訪の結びつきに思いあたりました。

【資料7】をご覧ください。岩城宝聚院に残されています縁起によりますと、一五〇〇年代後半のこと、宝聚院の住職に

宥性という学僧がいました。この人は、大和国の生まれで、初めは天台宗の僧侶ですが、後に西大寺へ赴き、叡尊の著書を見て密教の道へ進み、諸国を遍歴します。宝聚院へ来る前は、諏訪の神宮寺に住していたと記されています。

【資料7】『宝聚院縁起並代々略記』「宥性」

鏡（宥鏡）永祿四年傳宥性。々々和州ノ人、見テ霜露ノ忽ニ消ヲ自ラ出家ス。初メ歸ニ天台ニ。学ヲ教ヲ叡山ニ。而シテ謂ク、「教ハ只々教也。不レト如レハ就レ行ニ也」。還テ南都ニ勤ニ毘尼ヲ於西大ニ。泪ヲ閱スルニ「菩薩ノ之遺遺書ヲ、深ク入ル真言ニ亦 謂ク沙門以テ雲水ヲ一称ス。当ベシニ不住ヲ為レ行ト。古聖ノ力游スル三国如ニ比隣ノ。寧ロ絶繫シテ俟レヤ日ノ傾ヲ乎。遍歴シテ不レ輟ニ。寓シテ信州諏訪ノ神宮寺ニ登壇散華ス。稍々得テ好相ヲ。下ニ当国ニ彌羅、受ニ葉ヲ於鏡ニ。繩錘不レ怠、薪波惟レ勤ム。鏡有テ起弔ノ之歎ニ矣。余力且ツ属ス文墨書慕ヲ古風ヲ。就レ中細真佳也。嘗テ界ニ書ヌ融師ノ之二十四重ニテ重スルニ之朱ニ書ヌ深義ヲ。以テ為テ寺鎮」（8）。

岩城地方には、とにかく諏訪神社が多く、各地区に一社といても過言ではありません。また、『諏訪の本地』や諏訪神社にまつわる秘伝書も多く残されています「9」。いわきの地に諏訪の影響を見ることは、さほど難しいことではないのです。

5 ■ 地域間の交流 2 — 岩城から諏訪へ —

一方、諏訪ではどうでしょうか。【資料8】は、天文九年、岩城薬王寺の六世である深瑜から宥尊という僧へ授与された印信です。この資料は現在、諏訪市の仏法紹隆寺に所蔵されており、宥尊が岩城から仏法紹隆寺へと移ってきたことを示しています。

【資料8】 仏法紹隆寺蔵『深瑜両部印可許可』奥書

右於奥州岩城薬王寺道場両部密印奉授也／天文九年庚子（一五四〇）霜月六日／伝授大阿闍梨権大僧都法印深瑜たびたび申し訳ありませんが、今一度【資料4】に戻ってください。【資料4】で、永禄三年のところ、仏法紹隆寺で堯雅が印可を授与した際の受者の中に、宥尊の名が見えます。続いて【資料9】をご覧ください。【資料9】も【資料8】と同様に、天文九年に深瑜から宥尊という僧へ授与された印信です。

【資料9】 仏法紹隆寺蔵『深瑜印可』奥書

右於奥州岩城薬王寺道場両部密印奉授也／天文九年庚子
霜月六日／伝授大阿闍梨権大僧都法印深瑜

先ほども申しましたように、諏訪の仏法紹隆寺には、近世

のものです。岩城の八葦山で書写された『糸玉鈔』も確認できます。近世に至っても、岩城から諏訪へと移り住んだ僧侶がいたということになります。後ほどお話をさせていただきますが、諏訪の仏法紹隆寺も岩城の薬王寺と同様に地域の真言宗寺院の拠点だったと考えられます。調査によって浮かび上がってくる岩城の寺院と諏訪の寺院の結びつきは、寺院間の知識の交流を示していますが、さらに言えば、たとえば諏訪信仰の岩城への定着といった局面にまで発展していると考えられるのではないのでしょうか。

6 ■ 知識ネットワークの醸成

— 仏法紹隆寺聖教調査から —

いわき明星大学に赴任しまして、いわきの寺院調査を進めるうちに、徐々に諏訪との関わりが気になりました。ところで、また「縁があります」というしかないのですが、信州大学に赴任することになりました。早速、仏法紹隆寺へお邪魔してお願いをし、調査をさせていただきお許しをいただきました。

仏法紹隆寺（諏訪市四賀桑原）は、寺伝では坂上田村麻呂開基、空海開山とされる古刹です。中世以降、諏訪地方にお

ける真言宗の灌頂道場・談義所であり、江戸時代には諏訪高島藩の祈禱寺でした。所蔵される典籍は、早くに櫛田良洪氏や清水有聖氏などによって注目され、一部の典籍が紹介されています〔10〕。

調査は、二〇〇三年から始めました。門屋温氏、信州大学の学生たちともに行っています。現在のところ、約八〇〇点の書誌カードを取り終えたところです〔11〕。調査はまだ始まったばかりですので、現時点でわかっている範囲での報告ということになります。但し、仏法紹隆寺の聖教は、永正年間、一五〇〇年代初頭の書写本群を土台にして構築されています〔12〕。その立役者は俊円という僧侶です。俊円は、現在確認できる仏法紹隆寺のごく初期の住持でして、天文二年（一五三三）には、仏法紹隆寺において醍醐寺俊聡から無量寿院流（松橋流）の伝受を受けています。このことは【資料4】の表の最初にもあげておきました。仏法紹隆寺において、醍醐寺俊聡が俊円に印可を与えているので、俊円の学問も醍醐寺の俊聡によるのだと、普通は考えそうですが、俊円の書写本を調査すると、面白いことがわかりました。仏法紹隆寺の住持である俊円の書写本は、醍醐寺の俊聡から印可を受ける以前に、下野国氏家の能延寺の住持である俊尊から伝受を受け、書写したものが大半を占めているのです。能延寺は、俊聡や

堯雅が無量寿院流（松橋流）の印可授与の法会を執行した寺院でもあるのですが、仏法紹隆寺の俊円が能延寺で伝受を受け、書写活動を行ったのは、醍醐寺俊聡が、能延寺で無量寿院流の印可を授与するよりも前のことなのです。【資料10】は、仏法紹隆寺所蔵の『秘抄』巻八の奥書です。俊聡が能延寺で無量寿院の印可を授与するよりも二十年近く前の永正十二年の段階で、能延寺において俊円が伝受を受けたことが記されています。つまり、醍醐寺の法流ではあるが、その学問を醍醐寺で受けるのではなく、あくまでも下野国という東国の地で受けているのです。

【資料10】『秘抄』巻八奥書

御本記之／建久九年（一二九八）十一月十五日奉伝授遍智院／律師御房記範賢／成賢／建保四年七月十二日伝得此書了／同九月十日奉伝受僧正御房了／沙門憲深（生年二十五）／正嘉元年十一月十二日於報恩院／以上件御本書写之畢／金剛仏子俊誉（生年二二）／同二年八月八日於報恩院奉受于僧正御房了／沙門俊一（生年二三）／永仁元年十一月十三日以御本書写之了／同二年五月二十三日奉伝授于師主法印御房了／権律師義俊／文龜二年（一一五〇）夏伝受了同三年四月二日於行樹院書之了／金剛仏子俊尊／永正十二年（一一五五）丙子卯月二十九日玉生

於能延寺書之金剛仏子俊円

さて仏法紹隆寺住持の俊円は、醍醐寺無量寿院俊聡の法流を、醍醐寺ではなく、下野国能延寺で学びますが、同様のことは他の仏法紹隆寺の住持についても確認できます。

尊朝は、仏法紹隆寺の戦国時代の住持です。元亀元年（一五七〇）には、信濃国佐久の長命寺において、次に天正三年（一五七五）には仏法紹隆寺において、醍醐寺の堯雅から伝授を受けています。さらに天正十六年には直接醍醐寺に上り、三度堯雅から伝授を受けています。しかし、その他の多くの学問は、やはり下野国の寺院で受けているのです。

【資料11】をご覧ください。これは尊朝が下野国密奥寺で伝授を受けた時の印信です。伝授阿闍梨であった尊濟は、能延寺で学んだ僧侶でした¹³⁾。

【資料11】『尊濟印可』天文十四年（一五四五）

右於野州田原郷密奥寺道場授阿闍梨灌頂畢／天文十四年
〔歳次乙巳〕／伝授大阿闍梨権少僧都大和尚位尊濟

【資料12】の『御遺告』の奥書には、下野能延寺の俊尊の名が見えます。つまり能延寺俊尊の法脈のもとに、尊朝も位置づけられていることが確認できます。

【資料12】『御遺告』天文二十三年（一五五四）

応永二十二年（一四一五）乙未二月二十八日於上醍醐

慈心院禪室以光明心院法印大和尚弘鑊御秘（弘濟自筆）

御令書写了／俊海／応永三十二年乙未九月二日法印俊禅
／文明三年（辛卯）（一四七二）十月二十六日從遍照寺俊
宗伝之宝寿寺住金／資長賢／文明十三年（辛丑）三月二
十一日書之同寺住金剛仏子俊尊／永正元年（乙丑）（一五
〇四）四月四日書之同寺住尊祐／永正十一年（乙亥）七
月十一日書之證尊／天分二十年（辛亥）五月二十一日書
之尊順／天文二十三年（甲寅）八月二十二日尊朝

諏訪の仏法紹隆寺は、内陸地方に位置しますが、仏法紹隆寺の住持であった俊円や尊朝は、自らの学問を、中央の京都ではなく、もっぱら地方の下野国の寺院で身につけています。このことは、すでに一五〇〇年代には、下野国の談義所である寺院に、真言宗の拠点が形成されていたことを意味するでしょう。能延寺で学問修養した俊円は、諏訪仏法紹隆寺の住持となつてから、醍醐寺の俊聡を迎えます。この頃から、仏法紹隆寺は諏訪地方における真言宗の有力寺院として発展していったと考えられます。ちょうど同じ頃、遠く岩城の地でも、薬王寺を中心に真言宗の教学が盛り上がりを見せ始めていました。次第に諏訪、下野、岩城をつなぐ知のネットワークが形成されるようになり、醍醐寺の俊聡や堯雅の東国来訪によつて、さらに強固なものとなつていったので

はないか、ということが現在の仏法紹隆寺の聖教調査から推測できると考えています。

強調しておきたいことは、この知のネットワークが、中央から地方への一方的なものではないということです。それぞれの地域がそれぞれの求心力を持ち、また、新たな知識が中央から地方へではなく、地方から中央へと往還したりする、そういうものであったと考えられるということなのです。

7 ■ 資料調査・研究と文庫のプロデュース

— 目録作成・論文執筆と併せて —

ここまでのところで、地域資料の可能性とでもいうべき点について述べてきました。ここで角度を変えまして、地域資料の調査の課題について目を向けたいと思います。資料調査の目的に、目録の作成や論文の執筆があるのは言うまでもないことです。目録によって文化財指定の可能性が出てきますし、論文の執筆によって資料の価値が広く世に知られるきっかけともなります。しかし、実際に地域の寺院の調査を行っていて実感するのは、資料の保存・管理についても積極的に関わる必要に迫られることです。

【資料13】【資料14】【資料15】は、それぞれの寺院につい

て、私が今まで行ってきた活動を列挙してみました。資料の保存のためには、収蔵する箱の制作や修補がどうしても必要となりますが、いずれの寺院の場合も、金銭的な面で行き詰まってしまうます。その問題を解決し、後々までよい形で資料を残してゆくためには、檀家の方々の理解、さらには地域の理解が必要となります。

【資料13】 如来寺

① 目録作成、論文執筆

② 収蔵箱制作の相談

③ 修補の相談

④ 檀家の関心を促す

施餓鬼会（八月十七日）、開山忌（十二月十三日）でのお話

⑤ 地域の関心を促す

大学公開講座（二〇〇一年）、中学校総合学習の講師（いわき市立藤間中学校二〇〇四年九月）、公民館での講演（夏井公民館 二〇〇四年十月）

⑥ 如来寺展（二〇〇一年十月二十七・二十八日 いわき明星大学祭）¹⁴

⑦ 松峯文庫設立（二〇〇一年十二月十五日）¹⁵

⑧ いわき市指定文化財追加指定（二〇〇三年四月二十五

日)により、ほぼ全ての聖教が指定となる。〔16〕

【資料14】宝聚院

- ① 寺誌作成、論文執筆
- ② 収蔵箱制作の相談
- ③ 修補の相談
- ④ 檀家の関心を促す
大般若会(一月最終日曜日)でのお話〔17〕
- ⑤ 地域の関心を促す
いわき市市民講座講師(二〇〇三年三月)
- ⑥ いわき市指定文化財申請準備

【資料15】仏法紹隆寺

- ① 寺誌作成、論文執筆
- ② 収蔵箱制作の相談
- ③ 修補の相談
- ④ 檀家の関心を促す
仏法紹隆寺研究会講師(二〇〇三年十月)
- ⑤ 地域の関心を促す
大学公開講座(二〇〇三年一月)、諏訪市公民館講座講師(二〇〇四年九月)、ラジオ番組講師(二〇〇四年二月、二〇〇五年二月)

例えば如来寺では、施餓鬼会や開山忌の時に、資料につい

てお話をさせていただいてきました(④)。宝聚院でも、大般若会の後にお話をさせていただいています(④)。仏法紹隆寺でも一年に一回ですが、研究会の形でお話をさせていただいています(④)。お寺は、住職の意志ばかりで動くのではなく、檀家によつて支えられているので、檀家の方々に理解していただくことがとても重要になるのです。

また、檀家の方々だけではなく地域の方たちにも寺院の資料を、地域の貴重な歴史として理解していただき、檀家の方たちとともに守っていただく必要があります。如来寺では⑤・⑥、宝聚院、仏法紹隆寺では⑤になりますが、これまで、公開講座、中学校の総合学習、公民館での講師やラジオ番組などを通して広くお話をさせていただきました。中学校の総合学習での講師は、将来の理解者・協力者、あわよくば後継者を育成、いわば「種をまく」ために行いました。新聞社の記者の方々にも趣旨を説明し、協力を要請しました。幸いなことに、如来寺では、二〇〇三年四月二十五日に、蔵書のほぼ全てが市の指定文化財となりました(⑧)。現在、続いて宝聚院の蔵書も文化財指定申請のための準備をしております。

このように、もともとは、資料の保存・管理のために行ってきた活動ではありますが、理解を得るためにと地域に向けて情報を発信していく中で、それぞれの蔵書、聖教自体の持

つ歴史自体が、地域アイデンティティーを支える有効な手段であるという思いを、今は強く持つようになりました。岩城や諏訪で、それぞれの求心力のもとで構築されていった蔵書、すなわち知識の体系は、中央に隷属するものではなく、地域の価値そのものであるということです。いまだ調査は継続中で、今日の発表は中間報告のようなものですので、残念ながらも今のところ、知識の体系の具体的な姿は、現時点で「このようなものです」と明確にお話できませんが、徐々に明らかにしていければと思っております。

8 ■おわりに

地域の大学に勤めておりますと、地域貢献ということがとても重要な問題とされます。信州大学では、人文学部内に地域連携センターが設立され、学部による地域貢献の具体的な形として、長野県下の資料調査が日本史・日本文学の教員を中心に行われています。現在、仏法紹隆寺の調査もその一つとして組み入れられました。

逆に考えますと、資料学の可能性の一つは、こうした地域貢献にあるとも言えます。地域の時代と呼ばれる現在、各地の資料調査・研究により、地域のアイデンティティーの確立

に寄与していくことこそ、資料学の未来を切り開いていくのではないのでしょうか。以上、地域寺院の調査を通じて考えた、地域の資料学の可能性と課題を述べさせていただきました。

これで、発表を終わらせていただきます。ご批正を賜れば幸いです。

1 『如来寺史』（如来寺 一九九六年九月）

2 佐藤孝徳（いわき市文化財保護審議会委員）、小野一雄（いわき市文化財保護審議会委員）、斉藤理子（自由の森学園）、鈴木陽（いわき明星大学大学院卒業生）、酒井英美（いわき明星大学大学院卒業生）、鈴木三恵（東北大学大学院）、目黒将史（立教大学大学院）、島崎綾子（いわき明星大学卒業生）、堀江智人（同）、島崎圭介（同）、袴塚瑞子（同）、藤田琴江（同）、小野若菜（同）、上村佳恵子（同）、鈴木悠（同） 他が調査を担当している。

3 拙稿「如来寺松峯文庫蔵『三語集』について―浄土宗名越派の説草集―」（『説話文学研究』三七 二〇〇二年六月）、湯谷祐三『私聚百因縁集』と檀王法林寺蔵『枕中書』について（『名古屋大学国語国文学』八四 一九九九年）、同「養寿寺蔵『三国伝記』について」（『説話文学研究』三三三

一九九九年七月)

4 佐藤三千恵の報告による。

5 小野美香の報告による。『三語集』の編者、良要の甥にあたる袋中の著書、『枕中書』にも、『徒然草』が引用される。

6 拙稿「袋中の本箱」(『説話文学研究』三八 二〇〇三年六月)。袋中は、実際に『三語集』を自著に引用している(『南北二京霊地集』下・三九「愛宕山」)。小峯和明「怨霊から愛の亡者へ」補注(『説話の森』岩波現代文庫)

7 藤井雅子「堯雅僧正関東下向印可授与記」(『醍醐寺文化財研究 所研究紀要』一九 二〇〇二年十二月)、坂本正仁「醍醐寺所蔵「授与引付天文二年六月十二日俊聡」」(『空海の思想と文化』二〇〇四年一月)

8 拙稿「宝聚院蔵『宝聚院縁記代々略記』紹介・翻刻」(『むろまち』六集 二〇〇二年三月)

9 拙稿「小野一雄氏蔵『諏訪明神二十五箇条事』紹介と翻刻」(『むろまち』五集 二〇〇一年三月)、鈴木三恵「未公開『信州諏訪大明神御本地由来記』—翻刻と考察」(『日本思想史研究』三五 二〇〇三年三月)

10 榊田良洪「専誉の研究」(山喜房仏書林 一九七六年五月)、清水有聖「仏法寺本『沙石集』について」(『大正大学大学院研究論集』二 一九七八年二月)、小峯和明『野馬台詩』

の謎」(岩波書店 二〇〇三年十一月)

11 小林崇仁(大正大学総合佛教研究所研究員)、藤澤美希(信州大学卒業生)、嶋崎さや香(名古屋大学大学院生)、関島広祥(同)、千葉軒士(名古屋大学大学院生)、磯谷風太(信州大学卒業生)、清水葵(信州大学学部生)、小野美香(同)、河内聡子(同)、幸喜真帆(同)、小林ゆかり(同)、樋口はるか(同)、城倉美和子(同) 他が調査を担当している。

12 拙稿「仏法紹隆寺覚え書き」(『内陸文化研究』三 二〇〇四年二月)

13 「小僧数年之間尽求法之誠幸随能延寺法印大和尚位具支灌頂印可」(『尊濟印可』)

14 産経新聞(十/二十、十一/四)、河北新報(十一/十五)、福島民友新聞(十一/二十六)、いわき民報

15 河北新報(十一/十五)、いわき民報(十二/十四)、福島民報(十二/十七)

16 いわき民報(四/二十五)

17 福島民報(二〇〇一/一/二十六)、いわき民報(二〇〇一/一/二十八)